

「藝術と政治」讀書メモ

—安保訪中公演をめぐって

平成二十二年十月十一日

〈はじめに〉

初出は「藝術新潮」(昭和三十五年十月刊)で、「藝術と政治の問題」と題されてゐた。文中の冒頭部分に書かれてゐるが、この文章が、公になる前に、恒存は私信にて杉村に改作がいかにか間違つた行為であるかと説き、思ひひとある様に説得したか、「考へか違ふか」として受入れられずに終はつた。訪問団一行は、九月に中國に出發したか、一行がまた歸國してゐる。十月に、この文章が公にされた様だ。副題に「安保訪中公演をめぐって」とあるが、民間の文化交流を名目に、實際には、安保闘争をまっかけに政治的抵抗運動へと性格を変へた訪問とつたことを指摘したものである。恒存の鋭い目には、訪中新劇団の意圖は見えて見えてあり、彼等の日和見主義と政治主義は、さういふその演劇理論のあいまいさは、到底、見逃すわけにはいかるかつたのである。

とはいへ、進歩派知識の欺瞞的言動を本端微塵に打ち砕いた観がある。「常識に還れ」(同年八月「新潮」九月號)の、厳しい口調と比較すれば、そこは、根、かゝうせ居るものの恒存らしく、「局外者として無責任な批判をしようとは思はぬ」といひ、若い後者諸氏に、励ましとも取れる、徹を飛ばしてゐるのである。

へ各首上の要旨

一、

・新劇訪中公演の際、文學座の女子生が中國向けに書きなほされるにふさわした経緯について
資料となつた記事・談話・私信

・恒存の杉村への私信

・改作はしないか、最小限度にすべきたと中心告

・今回の訪中公演は、文藝座のみならず、新劇人すべてにとって、今後の問題であり、今日までの新劇の在り方の問題に關すると考へる

・森本薫作「女の一生」といふ作品

・戦争末期に書かれたため、表現上の制約があったかもしれない、占領期にもまた、占領政策による制約があったかもしれない、森本は病死し、彼自身の手による決定稿にあらうまま、その後、度々の上演に際し、適当に改作をしてみえた。

←

訪中公演では、なほさう、改作は当然だ

二、

・「日中文化交流を推し進めるといふ観念」は、日本の現代生活を反映したリアリスチックなもの、あるいは歴史的な反封建的な作品が「適当」である

中国側の要求

・日中文化交流協會内部の茶坊主的コンタクトマンが、中国側に配慮して「女の一生」改作を要求？

・自發的改作こそ、許されるものなのだ

三、

・藝術上の著作権の問題

・森本が一番書きたかったやうに直すならよいとはいへるか

←

←
第三者が、別の時代にそれを表現し得るといふことが
とうして考へるやうか

・「本林が書きたかつたこと」など本質的問題として
本人自身にさへ、わかるものではない。

←
制約はいろいろ形で存在し、完成といふことは
ありえない

（これかわからず、書いなり批評しぬしてぬる
暢気さにはあきれる）

・とるに未熟であらうと、いなるすも、何かを恐れて
歪んだものになつてぬようと、本人が責任を負ふべきである

④

・法律上の著作権

・改作問題は著作権法違反だ

藝術上の改悪か否かをのみ論いてゐるのは、
著作権に對する、あいまいな考へ方の重畳書きで
あり、思想、藝術そのものについての未熟な意識を
暴露するものだ

五

・「成井市郎改訂」とすれば、どんな改作も許されるのか

・改訂された作品は、「わかりやすくなつた」のではなく
政治的配慮から、内容がちがつてしまつたのだ

←
それであつて、時間その他の一般的理由を主張して
みる
↓二重の意味だ

・訪中公演後の日本での上演にもこの改訂版で
やるべきだ、日本ではこれまでの「原作」でやるなら
あまりに政治的考へ方だ、

・文化交流か 中国中心の政治運動か

日本の一般的に、反封建的の開争を行つてゐず、また作品に昇華されるほどには行つてゐないとしても、中国側が、それを見たいといふなら、文化交流ではある。

・五、六月、安保開争の「大衆的盛り上り」を見て、彼我の当否を考へ、喜んでゐる政治運動の意図もあるには、訪中公演に織り込まうと考へたのだ。

・今ごろになつて……

・安保開争そのものが、すでに手遅れであると言へるのだ。

・岸内閣の強行採決後、一般大衆と同様、新劇人か加はつた。そして、安保開争は反米開争であり、

中国の身方になり、お詫かするところであるといふ事実に直面した。

・開争の津波が急速に引き、新劇人だけが、訪中公演といふ電信柱にとり残された格好になる、帰国後、いったいどうするつもりか。

・新劇人は中国といふ國をどう考へてゐるのか。

・新劇人は、反安保、反米の態度、政治的抵抗運動の責任をとらねばならぬ。

・新作をいきなり外國の観客に捧ぐ込む、本國の観客には見せない。

← 非常識ではある。

・訪中公演で示した新劇人の卑屈な態度を見て、中国側は、本心では、彼らを、そして日本を、蔑めてゐることだろう。

・安保闘争 訪中公演で、最も「悪びれた」態度をとったのか、「文藝座」であり、日和見主義と「薩口」をなされた。
 ・日和見主義といふるは、日本新劇の主流派たる「俳優座」「民藝」は、もっとひどいのである。

ふたたび、共産主義的正義と結びつくために、手拭配りの必要があり、訪中公演を絶好の機会と考えた。文藝座は、徹うん利用されたのだ。

・日和見主義のもとには、自己喪失にある。
 政治や社会の動きに左右される弱さは、演劇理念のあいまいさと、演劇に対する情熱のうすさかろ生じる。

・個人であることと「討殺」されてきた新劇運動の弱點が、未だにそのまま残っていることを直視すること。

この問題を抛棄したり、すりかへたりしないこと
 ボスや獨裁者を許さず、「自分はその口は思はる」と
 その一語か言へる世界を、言へる自分を造り
 たまへ

へ感想

昭和三十三年九月の訪中公演の性格を、その本質を、恒存は見抜いてみた。帰国後、杉村をはじめ文藝座のメンバーは、かゝる様、公演を総括したのである。遠藤浩一の「福田恒存と三島由起夫」の「その道険し」の「雪」の峰」の章において、遠藤は次の様に書いている。

「築地座以来文藝座の芸術主義の伝統は断ち切られ、この劇団の変貌は決定的となる。久保田、岩田といった重鎮が是と投げたふと、杉村は、それにも増してのぶらびと政治や運動にのめり込んでいた。日中友好は、重要かつ魅力的なテーマであったといふ。文藝座の分裂が、この後、二年余り後に起きて、劇団「雪」が結成される。これまでに二度、芥川比呂志と、新劇団を

達成する意思を互に見せつつ、格が熟しているかたため、
 実現するかつた恒存であつたか、こゝでやつと実現したことん
 なる。現代演劇協會「理事長として、多忙を極める生活か
 始まつたのか、この「藝術と政治」の九章の末尾は、劇団
 活動へ劇団運営も含めること）の困難を見抜きつつ、面白い
 芝居をやろうとする情熱の感いられる。ブレることなく、
 筋を通してはきき恒常の強さには、ほんとほと感心して
 いまふほかはない。